

目 次

テーマ	人口減少時代の豊かな暮らしを目指して ～能登・七尾の地域づくり・人づくり～
プログラム	
10:00～	●あいさつ 中村 信一（金沢大学長） 武元 文平（七尾市長）
10:10～	●趣旨説明 中村 浩二（金沢大学教授・学長補佐）
10:20～	●話題提供 1) 原 範子（チャイルドケアハウス小丸山総括責任者） 演題:「親の元気・やる気は子どもの元気」 2) 神谷浩夫（金沢大学教授・地域連携推進センター長） 演題:「学生インターンシップから見える七尾市」 3) 上田 孝輔（株式会社 御祓川ひと育て課所属） 演題:「能登留学で能登を若者の挑戦のフィールドに」 4) 北村 祥一（のと共栄信用金庫総合戦略部次長） 演題:「企業ボランティアを通じた地域づくり・人づくり」 5) 篠原 もえ子、山田 正仁（金沢大学神経内科・医員、同教授） 演題:「なかじまプロジェクト～地域における認知症早期発見・予防モデルを七尾から発信～」 6) 長尾誠也（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授） 演題:「七尾西湾、熊木川、里山の研究から分かること」
12:00～13:00	●昼 食
13:00～14:20	●分科会「地域づくり」 座 長:川畠 平一（金沢大学客員教授・地域連携コーディネーター） 副座長:一花 正広（七尾市市民男女協働課主幹） ●分科会「人づくり」 座 長:浅野 秀重（金沢大学地域連携推進センター・教授） 副座長:原田 樹（七尾市企画課主幹）
14:20～15:00	●分科会発表（各座長） ●総括討論 司会:中村 浩二 ●閉会あいさつ 神谷 浩夫

あいさつ	中村 信一（金沢大学学長） 4
あいさつ	武元 文平（七尾市長） 5
趣旨説明	中村 浩二（金沢大学教授・学長補佐） 6
話題提供 1	原 範子（チャイルドケアハウス小丸山総括責任者） 8
話題提供 2	神谷 浩夫（金沢大学教授・地域連携推進センター長） 10
話題提供 3	上田 孝輔（株式会社 御祓川ひと育て課所属） 12
話題提供 4	北村 祥一（のと共栄信用金庫総合戦略部次長） 15
話題提供 5	篠原 もえ子、山田 正仁（金沢大学神経内科・医員、同教授） 18
話題提供 6	長尾 誠也（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授） 21
分科会発表 1 地域づくり	川畠 平一（金沢大学客員教授・地域連携コーディネーター） 23
分科会発表 2 人づくり	浅野 秀重（金沢大学地域連携推進センター・教授） 24
総括討論	司会: 中村 浩二（金沢大学教授・学長補佐） 26
閉会あいさつ	神谷 浩夫（金沢大学教授・地域連携推進センター長） 28



あいさつ

中村 信一（金沢大学学長）

タウンミーティングは平成14年に輪島市で第1回が行われ、今回でちょうど10回目になります。本日は武元文平市長をはじめ、たくさんの方々にご参集いただき、誠に感謝しています。

私は生まれが金沢市で、学生時代、児童医学研究会に参加した中で、能登島で健康活動や住民健診を体験しました。その意味で、能登は私にとって学生時代から非常になじみの深い場所です。

私は歴史学者ではありませんが、七尾の港は奈良時代から鹿島津といわれて、北前船の寄港地だと聞きます。こうした歴史のある七尾には、文化があります。

本日のタウンミーティングのタイトルは「人口減少時代の豊かな暮らしを目指して～能登・七尾の地域づくり・人づくり～」です。日本のみならず、世界が大きく変わってきた時代です。今までは大量生産して、大量消費する。これが豊かさのシンボルと言われていました。しかしこれはどうもおかしい。私は今こそ、物質的な豊かさではなく、文化的な豊かさに目を向けていくべきだと思っています。

私は医学部出身ですが、医学の進歩に伴って、健康な65歳以上の方々が増えます。そういう方たちの中には、都会の喧騒を避けて、豊かな文化があるところに住みたいとお考えの方も多いでしょう。日本のある地域を見ると、こういった傾向が顕著で、すでに人口が増えてきた地域も出てきています。

金沢大学も、こうした点に着目し、さまざまな取り組みを行っています。たとえば、里山里海に関するプロジェクトが、わずかではありますが、実を結びつつあります。今後も地道な努力を続けていきたいと思っています。

医学部の神経内科のグループでは、長年にわたって七尾市の中島町で認知症を中心にしたプロジェクトを行っています。すぐに成果が出るものではありませんが、認知症の予防、早期発見につながる医療が開発されるものと期待しています。

能登の河川を対象にした新たな研究も始まろうとしています。これも地域のみなさんの協力がぜひ必要です。

こうした研究成果を近い将来、豊かな地域づくりに少しでも役立てることができればと思っております。本日の成果が実り大きいことを期待して、私のあいさつとします。



あいさつ

武元 文平（七尾市長）

金沢大学には、これまでこの七尾の地域づくりについて、大変なご尽力、ご指導いただいている。具体的には、先ほど学長から話があった、山田先生を中心とした中島地域における認知症の早期発見のための研究プログラムがあります。さらに中村先生を中心にして、この能登・七尾の里山里海をどういう形で保全して活かしていくかという形でご指導いただいている。また大学コンソーシアム石川を通じて、交通まちづくり研究室の方々から合宿誘致に関する研究調査をいただいているし、金沢大学法学部の知的財産法ゼミナールのみなさんには、沢野ごぼうの知的財産のブランド化の取り組みにも協力していただいている。

その中で今回、「人口減少時代の豊かな暮らしを目指して～能登・七尾の地域づくり・人づくり～」という形で、タウンミーティングという場を設けました。先ほど中村学長から、一番大事なものは文化ではないかという話がありました。まさに私どものこの七尾という地域は、豊かな自然とすばらしい歴史文化を長年にわたって継承している地域です。しかし今、人口減少、特に若者の流出が大変急激に進んでいます。先般、国勢調査の速報値が発表されましたが、5年前の数値と比べると、約4,000人近くの人口減少が見られます。とりわけ我々は、若者の減少を非常に心配しています。

人口減少にどう歯止めをかけ、地域を今後、どういう形で持続させていくのか、それが現在、市の抱える最大の課題です。人口を増やすことは難しいとしても、何とか現在の人口を維持し、持続可能なまちづくりをするためには、どのような政策、取り組みが必要かということを、全力で考えているところです。地域の歴史文化を大事にしながら、豊かな自然や農山村をどう維持していくか、ということが重要な視点であり、その意味でも今回の金沢大学のこのような取り組みは、地元にとっても大変ありがたいと思っています。

今、能登全体を、国連の世界農業遺産として認定してもらおうという動きが進行していますが、そこにも金沢大学の里山里海の関係のみなさんに力をいただいている。こういう形で今後とも力をいただきたいと思います。

本日のタウンミーティングが、金沢大学と七尾市が連携して豊かな地域を生み出すきっかけとなる、意義のある会になることを心から祈っています。

趣旨説明

中村 浩二（金沢大学教授・学長補佐）

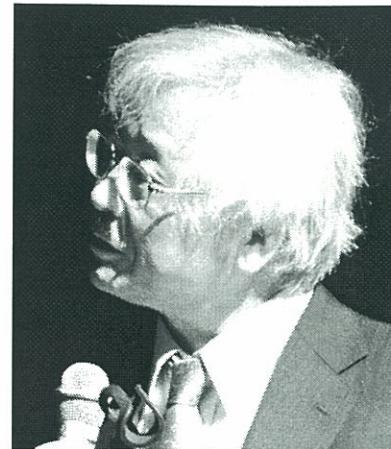
第10回を迎えるタウンミーティングが、ここ七尾市で行われることを大変うれしく思っています。本日は、七尾市が直面する現在の課題、地域づくり、人づくり、医療福祉の問題、将来のビジョンについて率直な意見交換をしつつ、金沢大学と七尾市とがどう連携すればいいか、模索していきたいと考えています。

七尾市のある能登半島は、すばらしい自然と文化がありますが、同時に過疎・高齢化という大変厳しい状況があります。能登の人口は今、約21万人とされていますが、もう20年すると10万人程度にまで減少すると予測されています。この背景には、ライフスタイルの変化や、グローバル化という、大きな波があります。能登半島だけではなかなか改善できない大きな問題ではありますが、その中でどう対応していくべきなのか、考える機会にしたいと思います。

金沢大学ではこれまで、能登に関連してさまざまな研究をしてきました。しかし研究の数が多いだけではだめで、研究成果を統合し、地元に役立てて、逆に地元から意見をいただきながら、さらに伸ばしていくような相互的仕組みが必要です。

金沢大学は、第二次中期目標の中で、「能登半島を中心とした総合科学的地域研究を推進して、国内最高水準の地域研究を推進する」と、明確に謳っています。学長アクションプランにも、「奥能登に能登オペレーティング・ユニット（能登ブランチ）を設定して、研究に資する、ここを拠点として地域社会の振興に寄与する」と、述べられています。ここでは奥能登を対象とすると書かれていますが、奥能登に限らず、能登全般を含めていきたいと思っています。たとえば、私たちは、珠洲市に拠点を置いて、「能登里山マイスター」育成プログラムを実施中ですが、この支援ネットワークは能登半島全域に広がり、受講生はさらに広く、金沢市や、東京などの大都市からも集まっています。

これまでに金沢大学が参加した、七尾市に直接関係する事業としては、平成20-21年の環境省「七尾湾里海創生プロジェクト」がありました。今年度は、石川県と連携した里海研究事業を実施中です。さらに、先ほど市長が言われました、「世界農業遺産（GIAHS）への登録事業」があります。GIAHSは、世界的に見て優れた特色を持つ農業システムを

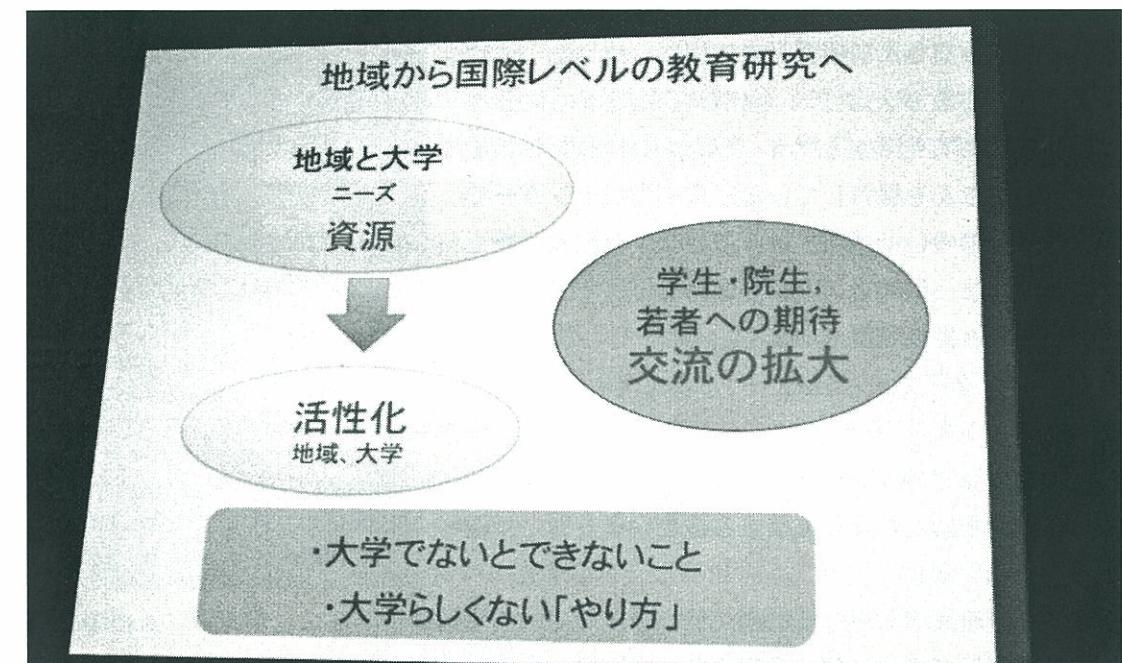


●中村浩二（なかむら・こうじ）

1947年兵庫県生まれ。金沢大学教授・学長補佐（社会貢献担当）、環日本海域環境研究センター長。里山里海再生学や「能登里山マイスター」養成プログラムなど里山里海プロジェクトの研究代表。専門は生態学。編著に『里山復権』（2010、創森社）、『インドネシアの昆虫の多様性：個体群動態と進化生物学の視点から』（英文）など。

登録し、伝統を守るだけではなく、その地域を活性化させるための、国連世界食糧機構（FAO）の事業であり、能登の農業システムは十分な世界的価値があります。昨年12月に、七尾市を含む能登半島の8自治体と新潟県の佐渡が一緒になって、すでに共同申請をしており、七尾市は事務局をつとめています。

このタウンミーティングは、地域と大学がお互いにニーズと知恵を出し合い、両方の活性化につなげることが目標です。大事なことは、未来を担う学生、若者と地域との交流です。金沢大学には現在、10,000人近くの学生が在籍しています。彼らを中心として大学と地域との交流の拡大を図る中で、大学でなければできないこと、あるいは七尾市でないとできないことを探しましょう。そして七尾を教育研究の拠点として、ここにある資源、自然をもっと活かしてゆきましょう。今日のタウンミーティングが、大きな出発点となることを期待しています。



話題提供 1 地域から

原 範子（チャイルドケアハウス小丸山総括責任者）

「親の元気・やる気は子どもの元気」

咲く時期を選ばず、春になればきれいな花が咲きます。しかし人から「きれいね。美しいわね」と褒められてこそ、その美しさはもっと増すものです。子育てをしている親も、私たちも社会の一員として輝きたい。そんな思いをもって、今日は私が今携わっている事業について、みなさんに紹介します。

チャイルドケアハウス小丸山は、七尾市に住む保育園、幼稚園に通っていない0歳から小学校6年生までのお子さんを保育している子育て支援センターです。転勤族の多い七尾市では、このような施設がたくさんあります。保護者の方からは、七尾はとても住みやすいまちと評価を得ています。

支援センターでは、「伝える」「つくす」「つなぐ」ということを基本理念とし、「子どもの利益につながる支援をする」「親の子育て力を支援する」「親が社会とつながりを持てるよう支援する」という方向で、活動を行っています。

1つ目の理念である「伝える」ということについては、私たち保育士が、親に保育活動、縄跳び、折り紙などを教えています。ひとりで子育てするという不安から、保育士には育児に関する相談が多く寄せられますが、支援センターはそういう親たちの安心の場にもなっています。親子でリトミック遊びをしたり、家庭でできない大縄跳びをしたり、家庭にこもって1人で育児をするのではなく、みんなでつながることで、喜びを感じることができます。

2つ目の「つくす」という点では、社会全体での子育て、親育て支援活動を進めています。具体的には、私たち保育士だけでなく、七尾市に存在する各種団体、インストラクターの会、詩吟の会、読み聞かせの会、食育の会のすみれ会などのみなさんと、ボランティアで私たちの活動に関わってくださっています。また金沢、加賀のNPOなどの支援団体ともネットワークを組んでいます。支援センターに集まる親子がつくるサークルを支援するという活動もしています。

最近は企業の社会貢献が盛んに行われていますが、支援センターでもそうした企業のボランティア活動を受け入れています。教材開発、教育で有名な企業は、0歳児向けの遊びという、会社の持つノウハウを生かしたものと、提供してくれました。また名古屋の



●原 範子（はら・のりこ）

1956年七尾市生まれ。石川県立保育専門学園卒。社会福祉法人御誠福祉会チャイルドケアハウス小丸山のスタートから関わってきており、子育て支援事業と放課後健全育成事業を行っている。チャイルドケアハウス小丸山は、子育てと地域との「つなぐ、つたえる、つくす」を理念に事業を展開している。

語学関係の企業は、子ども向けの社会貢献として、ボランティア活動をしてくださいました。七尾の能登起業塾「のと女の会」の方、金沢のウーマンスタイルという団体の方からは、女性の起業について提案していただいています。

3つ目の「つなぐ」という部分です。地域の人と人をつなぐこと、親子の地域とのコミュニケーションづくりをするということは、子育て支援センターを設立するときの、課題もありました。

具体的な活動として、七尾市の大手スーパーに対し、買い物ではなく、子育ての広場、遊びの場として活用することを提案しました。逆にスーパーからは、アンケート調査に協力してほしい、人を集めてほしいというニーズが寄せられ、地域内でのつながりをまたひとつ、つくることができています。

平成21年度は、行政から紹介していただいた能登島にある休耕田を耕し、農業に携わる経験をしました。「じたばた農園」といいます。これは私たち保育者、親だけではできません。地域の人たちが関わってくださいました。農園での活動には、市役所の職員も日曜日にボランティアで多く参加してくれ、とても力になりました。この活動はずっと続けていきたいと思います。今年度は海体験の活動をしようと、ますます期待が膨らんでいます。

「伝える」「つくす」という面では、親子が常に受動的です。ところが「つなぐ」という場面、特に主体的に農園の活動をすることで、「私でもできることがある」との気付きを得た親子が増えました。そのことが、私が「はっぴーバンク」というものを立ち上げるきっかけとなりました。

育児のために自分のキャリアや資格を諦めたり、活かせていないかったりする親は、たくさんいます。「はっぴーバンク」は、こうした人たちのキャリアや資格を生かす、幸せの人材バンクです。たくさんのメンバーが、自分ができることを発表し、される側からする側に変わりました。「はっぴーバンク」を通じて自己実現することで、子育てに自信を持つ親が増えています。2名の親が保育園に就職しました。資格をとって地域で活躍する人も出てきました。

Tシャツや小物、お菓子など、手作りの品を販売する「かえっこかえっこ」という活動も行っています。一人ひとりが店の店長として輝き始めたとき、そこは人のつながりの場となり、コミュニケーションの場となりました。私も人づくりがこんなに楽しいものとは知りませんでした。

チャイルドケアハウス小丸山は子育てのパワースポットです。転勤で七尾に来たある親子が、私にこう言ってくれました。「先生、私あと2年、この七尾に住みたいです。子どもを育てるのに、ここは素敵なところだから。私が親としてよりも、人として認めもらえる場だから」。

これで私の発表を終わります。どうもありがとうございました。

話題提供 2 大学から

神谷 浩夫（金沢大学教授・地域連携推進センター長）

「学生インターンシップから見える七尾市」

タウンミーティングはこれまで、石川県内各地で開催されてきました。過疎地域の方と話すと、学生の力で地域を活性化したいという意見が寄せられますが、そのひとつの答えとして、金沢大学として実際に学生を派遣している事業が、このインターンシップです。それについて簡単に紹介したいと思います。

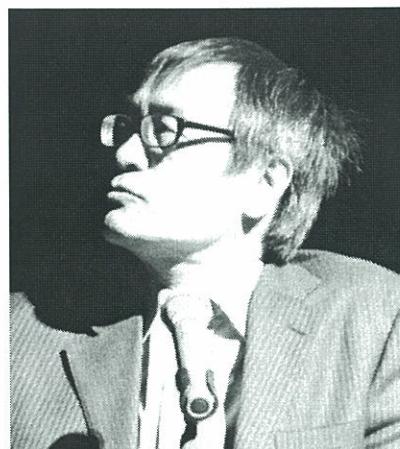
インターンシップという言葉について説明すると、基本的には就職を意識した活動です。学生が企業などの中で一定期間研修生として働き、自分の将来に関係がある就業体験を行える制度と定義しています。アメリカのインターンシップはこれとはやや違うようなニュアンスもありますが、日本ではこういう理解が一般的です。

最近は「サービス・ラーニング」ということが、教育課程の中で言われるようになってきています。これは地域と連携した教育方法で、学校の教室における学習と、地域で行われる有意義な奉仕活動、ボランティア活動、あるいはサービス活動を組み合わせた教授・学習・省察のための方法論です。日本ではまだサービス・ラーニングという言葉はあまり普及していません。インターンシップという言葉の代わりに使われることが多いかもしれません。

以上のことをもってすると、金沢大学で行っている「まちづくりインターンシップ」はインターンシップとサービス・ラーニングの両方の要素を兼ね備えたものであると、我々は考えています。ただ先に述べたインターンシップのように、必ずしも就職を意識していません。では、奉仕、サービスを提供することに力点があるのかというと、それも少し違います。

金沢大学地域創造学類は、地域づくりのリーダー養成を目的に、平成20年に新設されました。その中の地域プランニングコースでは、2年生の夏休みに約2週間のインターンシップを行い、30～40人の学生が、地域のまちづくり活動に励んでいます。これは大学のカリキュラムの一環として、必須の授業として位置付けられています。金沢大学だけでなく、他の大学でもこうした取り組みを始めているところもあります。

今年度は、金沢市、福井県鯖江市、長野県木島平村、内灘町、滋賀県愛荘町、加賀市、富山県黒部市、七尾市の株式会社御祓川で、「まちづくりインターンシップ」の授業が行



●神谷 浩夫（かみや・ひろお）

金沢大学地域創造学類教授。2008年からは地域連携推進センター長を兼務。働き方の地域差と男女差が主要な研究テーマ。主な著書に『シングル女性の都市空間』『地図でみる日本の女性』『地図でみる世界の地域格差』『現代韓国の地理学』などがある。

われました。人数は4～5人で、活動の内容は多岐にわたります。サービスを直接行う場合もありますし、地域のこれからについて企画立案するなど、プランニングに重点を置くケースもあります。

七尾市での具体的な活動を紹介すると、今年、七尾市の御祓川では内閣府の補助事業で長期インターンの受け入れプログラムを作っているのですがその手伝いをしています。去年は中島町の中山間地域の鉋打で、地域の住民の方と意見交換をしながら、集落営農の計画を作成しました。ちょうどそのときがキリコ祭りのシーズンでしたので、地元の方に交じってキリコを担ぐという体験もしました。

全国でこれに類似した取り組みがあるので紹介します。

先ほど言った、御祓川で受けている内閣府の地域密着型インターンシップも一例です。この目的として内閣府が考えているのは、社会的起業を担う人材を育成することです。対象は18歳から65歳で、必ずしも大学生に限定したものではなく、中途採用や退職者、転職を考えている人にも門戸を開いています。

農水省の「田舎で働き隊！」という事業もあります。これは大都市向けに、地域営農者の募集を促進するニュアンスが強いものです。2,000～3,000人くらい応募がありましたが、実際に農村への定着者は5%程度です。

国交省でも、大都市圏からのUターン、Iターン、Jターンの促進を図る「地域づくりインターン事業」を行っています。農水省の事業よりも若年層に焦点をあてており、20歳～35歳の、三大都市圏に居住する若者が対象です。これは受け入れ期間が短くて、2週間から1か月です。7月から9月に実施され、地域づくり活動への参加や地域産業を体験します。この事業に参加した学生が、自主的に「地域づくりインターンの会」という組織を作っていますが、金沢大学の「まちづくりインターンシップ」の設計をする時に、彼らの話を聞いて参考にさせてもらいました。

最後に、金沢大学の学生の傾向について、私見を述べますと、金沢大学の学生は公務員志向が顕著なのですが、農学部がないということもあって、農業政策、農村政策、あるいは労働政策、雇用政策、観光政策、政策系の知識が不足しがちで、こうした分野に対して、学生の目がなかなか向かない部分があります。地域の問題を縦割りで捉えている傾向もあります。政策という視点では、農林課とか福祉課などと縦割りの部分がなければ、実際に動かしていくことはできませんが、生身の人間には、これらすべてのことが関係しているわけです。そういう視点が足りないということです。また起業家精神が乏しいようにも感じています。大学生はある意味で社会の鏡ですので、社会全体がそういう方向に向いているのだろうとも思います。いずれにしろ、社会全体を考えたときに、これからは能登、七尾の起業家精神を高めること、それから地域が若者を育てていくことが、必要になってくるのかと思います。その面で、こうしたインターンシップ事業の必要性も高まってくるだろうと思っています。

話題提供 3 地域から

上田 孝輔（株式会社 御祓川ひと育て課所属）

「能登留学で能登を若者の挑戦のフィールドに」

今日は長期実践型インターンシップ能登留学について紹介します。

ここで伝えたいことは、大まかにいうと3つあり、私自身のことと、能登留学とは何か、能登留学では平成21年度何をやってきたのかということです。

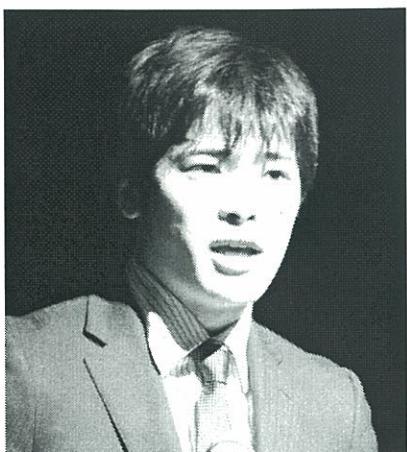
まず、私自身のことですが、まちづくり民間企業、株式会社御祓川のひと育て課 上田孝輔と申します。今年で22歳になります。出身は兵庫県宝塚市で、大学進学で石川県金沢市に来ましたが、3年次に大学に興味がなくなったというか、もともとあまり勉強が得意でなかったので、大学を辞めてしまいました。辞めた際に金沢市内で私が参加していたゴスペルチームで現社長の森山奈美と出会い、今の仕事を紹介してもらいました。

能登に来たのは2年前の12月、寒い時期でした。まずアルバイトでの雇用を提案され、年度内という期限付きという形で御祓川にアルバイトとして雇用していただきました。そこで「七尾湾里海マップ」という

ものの作成のため、漁業関係者や里海の関係者の方たちにヒアリングを行ったり、写真撮影を行ったり、文面を作成したりしました。その中でたくさんの人との出会いがありました。会う人がみなさん、「上田くん、七尾には骨をうずめにきたのか」と言います。自分はそういうつもりで七尾に来たわけではありませんが、みなさんにこう聞かれるので、もしかしたら自分も七尾に骨をうずめにきたのか、七尾に住みたくてきましたのかと勘違いしました。たくさんの人との出会いについて、当社の社長は「縁パワーメント」、縁の力で人を元気付ける力があるといいます。

NPO法人ETICが主催する「地域仕掛け人市」という東京で行われたイベントで、3分間のプレゼンをするという体験もしました。今まで全く業務経験のない若者に能登留学の紹介を3分間でしてこいと言われ、断ることもできずにやったところ、なかなかの評価を得ました。これを受け、もしかしたら能登留学は僕に向いているのではないかと、また勘違いしていました。

この2つの経験、人の縁のつながりと能登留学を紹介したことが僕の中ですごく熱くなぎって、自分自身の5ヶ月の実習期間をインターンシップとして学生に紹介していくば、



●上田 孝輔（うえだ・こうすけ）

兵庫県宝塚市出身、学生時代は金沢市で過ごすが、理想の学生生活とのギャップに戸惑い大学中退。2009年に株式会社御祓川入社し、能登デビュー。まちづくりに必要不可欠な若いエネルギーを存分に発揮。自らの経験を“能登留学の原形”と考え、学生視点でインターンシップのコーディネートを行っている。

自分のように熱く燃える人たちが能登に集まってくれるのではないかと考えました。これを社長に進言したところ、ではうちで働いてくれという経緯で、今、御祓川で働いています。

では能登の問題について、改めてみなさんと考えていきたいと思います。能登では今過疎化、人口減少、高齢化が進んでいます。これに加え、4年前の能登半島地震の影響で、他の問題が浮き彫りになっているかと思います。そして何より若い人が少ないことが、大きな問題です。

そういう背景がある中でも、能登にはそれを覆すポテンシャルがあります。輪島塗などに代表される伝統産業があつたり、持続可能な生態系、里山里海があつたり、長年継承されている祭りなど、地域に根ざしたコミュニティもあります。そして温かい人、住みやすい土地があります。では能登は何でもできるのかと思いきや、挑戦的な若い人がいません。そこで能登留学です。

能登留学とはいいったい何か。私は、若者と企業を結んで地域で挑戦が生まれるようにする。こういう思いを持っています。新事業を立ち上げたい、イノベーションをしたいという企業が七尾にあります。そして挑戦したいという若者がいます。でもフィールドがない。どこでやればいいか分からない。何をしたらいいか分からない。こういう思いを持った学生と企業をつなぐ役割を我々御祓川が担っています。これが能登留学です。

我々は、企業の課題を学生が解決できるように、学生が期間中にどんな部分を担っていけばいいのかという視点でプロジェクトを組みます。その結果、能登の地域の企業でイノベーションが起こったり、地域課題の解決のためのまちづくりの指針が示されたりする、これが御祓川の目指す能登留学です。簡単にいうと、若い人の力を能登に集め、みんなが元気になる仕組みではないかと、個人的には思っています。

こういう取り組みは七尾だけではなく、全国各地で行われています。全国の長期実践型インターンシップの受け入れ団体は、全国で約20団体あります。その20団体をつなぐ「チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト」という団体があり、「夢を実現できる地域を創る」というのをモットーに活動しています。その20団体を通して、長期実践型インターンシップに挑戦した人数は、平成21年度、約250人です。

では平成22年度、能登留学でどういう取り組みをしてきたのかを紹介します。

1人目は、地元スーパーの地産地消推進プロジェクトに参加した、九州出身の学生です。彼が担当者と議論をし、その中でレジのスタッフとお客様がしゃべっている機会をあまり見ないという話になりました。そこでレジのスタッフが普段どんなことを思っているのか書いたボードを店内に設置したところ、お客様とのコミュニケーションが増えた、社内のコミュニケーションを円滑化したという成果がありました。この取り組みは、新聞にもとり上げられました。

彼はまた、このスーパーで毎年行っている高校生の職業体験の受け入れ担当にもなり、プログラムを作る作業にもあたったということです。自分自身の能登留学の体験を、高校生の職場体験のプログラムに盛り込んだという話を聞き、私は大変感銘を受けました。能登留学が終わったあと、彼が今何をしているのかというと、九州に帰ったのではなくて、まだ七尾に残っています。高校生を教えた経験から、今の高校生は夢をあまり持っていない、夢を育む塾を作りたいということで、今、七尾の駅前の塾で修行中です。